

## 時代を駆ける：岡部健／2 治療一辺倒の「イケイケ」

◇TAKESHI OKABE

《栃木県大谷(おおや)村(現小山市)のへき地の診療所で生まれた。父も医師で、保健所長だった》

姉がいましたが、私が生まれる前に赤痢で亡くなりました。当時は乳児の死亡率が高かった。父は私が熱を出すたびに、抗生物質ペニシリンの注射を打ちました。姉のことがあり心配だったので、火鉢の上で注射器を煮沸していると、「あ、打たれる」と嫌でたまらなかった。

私が3歳の頃に父は肺結核になり、生死をさまよいました。手術で一命を取り留めたんです。

《医師を目指し70年に東北大学医学部入学》

湯川秀樹さんのような物理学者もあこがれましたが、医者なら人の役に立てるかなと。呼吸器外科に進んだのは、父が結核で苦しんだからと言えば格好いいですが、指導教官から「治療ができる方がいい」と勧められたため。当時は診断しても、治療のすべがない診療科もありましたから。

学生運動がまだ盛んでした。学費値上げ闘争で試験をボイコットし、私を含め数千人が留年。闘争に敗れて目標を失い、友人の半分は退学、自殺者も出た。私は酒とマージャンの日々で、飲み代はパチンコで稼ぎました。でも酒場で多くの人と語り合い、さまざまな暮らしや考え方に触れることができました。

《78年に卒業し、東北大学の抗酸菌病研究所(現・加齢医学研究所)に。肺移植の研究をしながら臨床経験も重ねた》

心臓移植の妥当性が問われた68年の「和田移植」の影響が残り、移植医療は停滞していましたが、心臓と肺の同時移植を目指し動物実験などに没頭していました。結核に代わって肺がん患者が急増しており、治療にも取り組みました。東北大学の肺がん手術数は全国トップレベルでしたが、それでも数十年で300例程度。治せる、治せないでなく、がんを取れるかどうかという時代です。

治療一辺倒の「イケイケ」外科医で、治療の精度を上げるばかり考えていました。父の病気や姉の死が影響していたと思います。命を延ばすだけでいいのかと自問するようになったのは静岡に赴任してから。ある男性患者がきっかけでした。

=====

聞き手・下桐実雅子 写真・丸山博／火～土曜日掲載です

=====

### ■人物略歴

◇おかべ・たけし

医療法人爽秋会理事長。がん患者の在宅緩和ケアのパイオニア。61歳(写真は今年2月、仙台市でスタッフたちと。中央が岡部さん)

毎日新聞 2011年5月25日 東京朝刊



緩和ケアについてスタッフたちと議論する医師の岡部健さん(中央)＝仙台市青葉区で2011年2月18日、丸山博撮影